

<論文>

グローバル化とメディア翻訳：  
社会記号論系言語人類学の切り開く新たな地平  
Globalization and Media Translation: A New Frontier  
Opened Up by Semiotic Anthropology

坪井 睦子

(明治学院大学非常勤講師)

**Abstract**

Today translation practices in the mass media lie at the heart of the circulation of news and play an ever more important role in a rapidly globalized world. At the same time, media translation is faced with such challenges as the imbalance of power and the asymmetric flow of information associated with globalization. Studies in this field, however, have not shown substantial progress compared to other areas, such as the studies of literary translations. This is mainly because even within the domain of translation studies, media translation has been considered an objective and neutral activity where equivalence of meaning is easily achieved between the two languages. Aiming to reconsider the relationship between globalization and media translation, this paper articulates major issues regarding this field of study and raises the possibility of applying the theoretical framework of semiotic anthropology to the relevant issues.

1. はじめに

現代におけるメディア翻訳、中でも主に国際報道に関わるマス・メディアの翻訳実践について考察しようとする際、その背景としてまず考慮、検証されなければならないのはグローバル化という現象であろう。インターネットに代表される情報技術、情報メディアの飛躍的な発展と、1989年ベルリンの壁崩壊に象徴される冷戦構造の終焉、ヨーロッパの再編、市場経済の全世界的拡大など一連の歴史的・政治的・経済的動きによって、この数十年の間にグローバル化が一気に進み今日に至っている。メディア翻訳<sup>1</sup>は、一方で新たな世界秩序の構築、他方で世界各地に吹き出す地域紛争の解決に直面する国際社会の現代的課題とも深く関わる実践であり、そこで重要な役割を担っている。しかしながら、グローバル化が国際社会における権力関係を背景として進展し、その中で欧米主要メディアが強い影響力を保持する中で、情報流通にも著しい不均衡が見られる現状を鑑みた時、メディアの表象とそれに関わる翻訳にはグローバル化を背景とする新たな課題も浮かび上がってくる。本稿は、まず翻訳学におけるこれまでの研究動向を概観した上で、グローバル化とメディア翻訳の関係を近代から現代までの歴

史の中に位置づけ、考察することを通して、メディア翻訳研究が直面する現代的課題を明らかにし、その上でこの課題に取り組むためのひとつの新たな理論的枠組みとして社会記号論系言語人類学の有用性と可能性を論じるものである。

## 2. 問題の所在

現代社会における国際報道の重要性について異論を挟む者はいないであろうが、報道における翻訳の存在やその影響については、ほとんど考慮されず、関心が向けられてこなかった。そこには、「コミュニケーションとは情報伝達である」という今日でも一般的なコミュニケーション観(情報理論的コミュニケーション観)が背景にあると考えられる。人々が翻訳に抱くイメージも異なる 2 言語間の「等価的な」置き換えというものであろう。加えて、報道に対する客観性・中立性という規範<sup>2</sup>、期待が一層メディア翻訳の言語行為的側面を見えにくくしている。このようなコミュニケーション観は、近年までメディア翻訳の受容者である視聴者・読者だけでなく、メディア翻訳の研究に携わる人々の間でも共有される傾向にあった。その結果、翻訳学におけるメディア翻訳研究は他の分野、特に文学をはじめとするフィクション領域の研究に大きく後れをとっている。一方、メディア研究においては、メディアで使用される「言語」について徐々に注意が向けられるようになってきているが、メディアにおける重要な言語使用のひとつである「翻訳」への関心は甚だ薄い状況である。

Schäffner & Bassnett (2010, pp. 4-9) が指摘するように、どのような政治的談話の報道とそれに関わる翻訳行為も、出来事を再コンテキスト化したものであり、いかなる再コンテキスト化にも変容が伴う。さらに、現在国際報道の流通と情報内容においては国際通信社が大きな影響力を持っており、そこでは翻訳に対して明確な認識が確立しておらず、ジャーナリストの仕事と翻訳行為の境界が曖昧なまま両者が渾然一体となってニュースが産出される状況がある (Bielsa & Bassnett, 2009)。現代社会における報道は、政治、メディア、翻訳が複雑に絡み合う場なのである。したがって、メディア翻訳研究には、従来の「翻訳」という概念を超えた視点やアプローチが必要とされる。Baker (2006) は、翻訳と通訳が国際紛争に大きく関わっている点を取り上げ、国際報道におけるテキストを含むナラティブが現実世界を表象するだけでなく、現実を構築する点を強調し、その流布と正当化に翻訳が重要な役割を担っていると指摘する。この意味でも、メディア翻訳の現状と課題を明らかにし、研究の新たな枠組みを模索する必要性が問われていると言える。

メディア翻訳の複雑さと多層性は、何よりも報道という実践も翻訳という実践も多様なコンテキストにおいて生起する言語行為であることに起因する。言語を介した行為であるからには、語用つまり言語使用としての特徴を有する。言語使用は、「何かについて何かを言う」という側面(言及指示的機能[referential function])と同時に、言語使用者たちのアイデンティティや権力関係に関わる社会的な側面(社会指標的機能[social-indexical function])を併せ持つ(小山, 2008, p. 39)。このことは、言語使用には言語使用の場(コンテキスト)における力関係が反映されるということの意味する。言語使用を介し不平等な関係が構築、維持されるのが世界の現状であり、メディアの言語は教育や医療の言語と並ぶ不平等な言語使用の典型である(メイ,

2005, pp. 441-442)。つまり、メディア翻訳とは、このような不平等な言語使用に関わる言語使用であると言える。そうであれば、メディア翻訳を言語行為として考究することは、現代の翻訳学に課せられたひとつの課題であると同時に、その究明には従来のコミュニケーションモデルに代わる、社会・文化・歴史的コンテキストを射程に収めたコミュニケーションモデルと理論的な枠組みが必要とされるのではないか。情報理論的モデルに依拠する限り、そして言語の語用面、特に社会指標的側面の議論を欠く限り、翻訳学における「等価」の問題も、近年の傾向のように単なる幻想(cf. Snell-Hornby, 1988)、あるいは信念の体系(cf. Gutt, 2000; Toury, 1995)にすぎないものとして片づけられてしまう。しかし、翻訳が翻訳として存在する意義がある限り、人々の等価への希求と努力は続くだろう。したがって、等価の理論を踏まえた上で、コンテキストを十全に考慮できるメディア翻訳研究の枠組みが求められていると言える。

### 3. メディア翻訳研究の現状と動向

本稿では、「メディア翻訳」という語について、「マス・メディアを介して発信される報道の翻訳」という意味に限定して論じるが、この領域の研究動向を振り返る前提として、ここではまず「メディア翻訳」が一般的に指す領域について確認しておきたい。日常生活においてメディアという語は、新聞、雑誌、テレビ等マス・メディア<sup>3</sup>の同義語として、またその中でも報道の役割に焦点化して使用されることが多い。一方、メディア翻訳という語は非常に広義、多義的であり、翻訳の実務の場でも翻訳学においても、メディアを介した全てのテキストの翻訳を指して使われているのが一般的である。その中で、マス・メディアの報道に関わる翻訳は、広い意味でメディア翻訳に位置づけられるが、一方で、日本の翻訳業界では、新聞や雑誌記事あるいはルポルタージュなどの出版物の翻訳については、出版翻訳に分類されることもある。テレビで放送されるニュース等の翻訳は、放送通訳とも呼ばれるように通訳の要素が大きい。他方、音声や映像を伴う翻訳は、一般的には視聴覚翻訳(audiovisual translation, AVT)とも呼ばれている<sup>4</sup>。これは、テレビやビデオの登場によって使用されるようになった語である。1995年に誕生100年を迎えた映画の翻訳の領域も、当初は「映画翻訳(film translation)」と呼ばれていたが、その後AVTとして扱われるようになっていく。今日では、テレビ、映画、コンピューターなどの「画面(screen)」を通して配信される全ての翻訳は「映像翻訳(screen translation)」と呼ばれる。1990年代には、グローバル化と情報技術の急速な発展を背景に、文字、音声、動画など様々な形態の情報を統合するマルチ・メディアという用語が一種流行し、マルチ・メディア翻訳(multimedia translation)あるいはマルチ・モード翻訳(multimode translation)という用語も登場した(マンデイ, 2009, 第11章)。こうした様々な表現やそれらが意味する領域の重なりのために、混乱が生じているのが現状であるが、Gambier(2003, p. 172)が指摘するように、どれも複数の種類の「記号」からなるテキストを対象としている点に留意すべきであろう。このことは、写真、地図など非言語記号が使用されている新聞等の出版物にも当てはまる。

従来、翻訳学での研究対象は、いわゆる書籍翻訳(出版翻訳)であり、その中でももっぱら文学作品が中心であった。翻訳の多くが文学以外の領域で実践されているにもかかわらず、翻訳学では文化における文学以外の領域の翻訳の重要性はほとんど顧みられず、その実践

について詳細に研究、記述されてこなかった(Cronin, 2003, pp. 1-2)。こうした中で1990年代になると、(マルチ)メディアへの関心がようやく高まってくる。その成果は、Gambier(1998)、Gambier & Gottlieb(2001)、Orero(2004)、Díaz-Cintas(2009)、Díaz-Cintas & Anderman(2009)などの出版となって結実する。しかし、これらの書名からも窺えるように研究の関心はメディアの中でもマルチ・メディア、あるいは映像・音声を伴う翻訳にあり、その議論の中心はフィクション領域の映画であった。このように広い意味でのメディアへの関心は高まったが、報道の分野の翻訳については、極めて関心の低い状況が続いてきた。この分野の研究の遅れについて Franco(1998)は以下の点を指摘する。すなわち、翻訳研究者自身が“*translating facts is a straightforward, non-problematic activity*”(p. 235)という考えを保持してきた点である。ドキュメンタリーに限ってみても、伝統的に客観性が求められ、文学や映画のような創造的な工夫など許されないドキュメンタリーは、研究としては面白みがないと考えられてきたという(ibid.)。

しかしながら、Bielsa(2007)、Holland(2006)、Kang(2007)各論文や、Bielsa & Bassnett(2009)、Schäffner & Bassnett(2010)等の書籍に見られるように、この数年着実、かつ本格的にメディア翻訳研究が進み始めている。これらの研究の共通の視点としてまず挙げられるのは、報道における翻訳の不可視性に注目している点である。前述したように、ニュース報道の世界では、翻訳に対して明確な認識が確立しておらず、ジャーナリストの業務と翻訳の業務が明確に分けられていないこと、それゆえにまたジャーナリストが翻訳理論の学習はもちろん、実務訓練も受けていないことがこの分野での翻訳実践を検証する際、大きな課題となっている(Bielsa and Bassnett, 2009)。Schäffner & Bassnett(2010)は、メディアと翻訳の関係の不明瞭さは、ニュース翻訳の複雑な過程を考えた場合驚くに当たらないとして、以下のように例を挙げて説明する。例えばインタビューの場合であるが、ある言語で行われたインタビューは、まず編集され、次に要約され、さらに他の言語に移し変えられ、そこで再び編集され、通信社の言語に相応しい形に変えられる。そしてある特定の出版物の用語規則が適用された上で、報道スペースにうまく収まるよう短くされるなど一連の工程を踏む。この全工程にはグローバル化社会に必須のスピードが求められる(p. 9)。このように、メディア翻訳は従来の意味での翻訳、つまり聖書翻訳に起源を持ち、近代文学の翻訳へと展開してきた西洋的文脈における翻訳という概念が当てはまらないだけでなく、従来の言語間翻訳のモデルでは対処できないものであることが示唆されるのである。

以上のような現在のメディア翻訳研究の動向を踏まえた上で、次章においてメディア翻訳の実践と深い形で関わっているグローバル化に焦点を当て、そこからメディア翻訳の今日的課題を考察する。

#### 4. グローバル化とメディア翻訳

##### 4.1 グローバル化における情報流通

グローバル化と情報テクノロジーの進展により、人々が受け取る情報はその量と質の両面において、またその報道方法や取材範囲も以前とは比較にならないほど充実したものとなってい

る。しかし、我々に身近な日本の報道体制に目を向けてみるだけでも、国際報道の提供する情報の量と内容に関し、大きな偏りのあることにすぐに気付く。日本では、取材範囲については、昨今アジア重視の姿勢を強化している。しかしながら、その取材体制の充実度から言えば米国が他を凌ぐ状況であり、東アジアや欧米以外の地域、特に第3世界諸国に派遣される特派員はわずかである(大石・岩田・藤田, 2000, pp. 22-23)。日本の特派員の多くは、国際レベルで政治・経済・文化的に強い影響力のある国家や地域、あるいは人や情報の面で日本と交流が盛んな国家や地域に送られる(大石, 2005, p. 54)。一方、日本に限らず世界の報道は、ロイター、AP、AFP の欧米国際通信社 3 社が国際報道の配給を事実上コントロールし、グローバルな国際報道の第1次情報を供給している(伊藤, 2006, p. 3)。このような非対称的な情報のグローバルな移動と、欧米を中心とする情報の国際的配給システムの構造が、報道の内容をも左右している現状である。

1980年代末から90年代という時代は、グローバル化の波がメディアにも一気に押し寄せ、様々なニュースが世界中を駆けめぐるといふメディアにとっても歴史的転換期であった。89年の天安門事件、ベルリンの壁崩壊、90年夏のイラクのクウェート侵攻、翌年の多国籍軍によるイラク空爆、それと並行するように起きた旧ユーゴスラヴィア、ルワンダ等での紛争は瞬く間に世界中にニュース映像や報道記事となって伝えられた。21世紀に入ってから9.11同時多発テロ、その後のアフガニスタンやイラク、2011年に始まる中東・北アフリカでの新しい政治のうねりに関する報道も記憶に新しい。これら全てのニュースの発信と流通に国際通信社、欧米主要メディア、そして数多くの翻訳行為が大きく関わっていたことはもちろんである。

グローバルな情報流通のルーツを辿れば、第2次世界大戦前の国際放送に遡る。その背景に、西欧列強間の植民地獲得競争があったことは言うまでもない。大石・岩田・藤田(*op. cit.*, p. 215)が、「通信社の歴史は、国際的なニュースの流通が国益と不可分の関係にあることを例証」するものだと述べるように、イギリスのロイター、フランスのAFP等の国際通信社は帝国主義の下で活動を拡大した。戦後、米国のAP、UPIとソ連のタス通信が加わり、東西冷戦を背景として、通信社が政治的イデオロギーと国益を代弁する機能を担い、「第一世界のニュースと第二世界のニュースは、あたかもそれだけで世界のニュースを構成しているかのように世界中を駆け回り、東西両陣営は自らの視点からニュースを世界に流通させた(*ibid.*)。これに対し、第3世界諸国から異議の声が上がった。それは、世界の情報の主導権が主要国の国際通信社に握られている中で、自らに関する情報が国境を越えて流れていくにも関わらず、それを自らの言葉で発信できない現実に対する第3世界の不満と、その現実を克服したいという彼らの願いの表れであった(鈴木, 2005, pp. ii-iii)。70年代前半、第3世界諸国から世界の「新情報秩序(New Information Order)」の確立が提案されるが、国連の場では自由主義に基づく伝統的な自由流通論を前にして十分な成果は上げられなかった。それでも、これら諸国は、第3世界通信社プールを作り、西側の報道支配から脱する道を模索し、情報主権の確立に努めていくことになる(大石・岩田・藤田, *op. cit.*, p. 217)。こうして、世界における情報流通をめぐる対立は冷戦の終結を経て、東西間から南北間へ、東西のイデオロギー間の対立から西欧対非西欧間の文化的対立<sup>5</sup>へとその軸を大きく変化させているが溝はなかなか埋ま

らない現状である。このようなグローバル化における不均衡な関係性の中でメディア翻訳は実践されているのである。

#### 4.2 グローバル化の2面性

ここで「グローバル化(globalization)」という語の意味についてまず振り返った上で、グローバル化という現象を近現代史との関連から考察することにしたい。地球を意味する“globe”やその形容詞“global”は古くから使用されている語であるが、そこから派生した造語“globalization”という語が使用されるのは、80年代半ばから90年代以降である。この語が意味するところは、政治や経済、社会、文化において生起する様々な出来事・事象の「越境的過程」、「ナショナルな境界を越える過程」と言えるだろう。この意味で、用語としては新しいが、現象としてのグローバル化は、現代だけに特徴的なものではない。メディアとの関連で言えば、活字メディアと印刷術の誕生が16世紀以降の近代社会に大きな影響を及ぼし、この新しい情報技術が前提となって国民国家と国語が形成された(吉見, 2004, p. 83)。「国民とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体である」と述べたのはアンダーソン(1997, p. 24)だが、アンダーソンが注目したのは、「国民(nation)」という想像の共同体の創出に果たした出版業者と国語で書かれた大量の出版物の大きな役割であった。新聞、そしてその後のラジオやテレビに代表されるマス・メディアの発達と普及が、「国語」の普及と「国民国家」の成員としての情報の共有化による「国民」の形成に貢献した。このナショナルな空間である国民国家の形成期は、一方で、帝国主義や植民地支配としてナショナルな空間を越えた支配が拡大した時期でもあった。サイド(1993)が指摘するように、帝国主義は欧米の優位性をイデオロギー的、文化的に構築することによって植民地支配を正当化する装置を作り上げていった。オリエンタリズムは「我々」である「西洋」が、「他者」である「東洋」を支配する装置であり、また東洋においてはオリエンタリズムが内面化されることにより、近代世界の秩序が形成されていった。近代という時代は、常に「我々」と「他者」を区別しながら、統合と差異化を繰り返す過程であったと言える。このようにグローバル化は「近代」という時代を反映するものでもあり、そこにグローバル化の両義性が現れる。つまり、グローバル化を通し、それまで切り離されていた人々が境界を越えて結びつく一方で、そのような過程に伴って新しく作られる境界により、境界の外の集団が絶えず差異化されてきたということである。

このような両義性を持つグローバル化にメディアが大きな役割を果たす一方、翻訳もまた重要な貢献をしてきた。つまり、翻訳はナショナルな存在である国民国家の形成と再編、他方でグローバルな世界秩序の再編を目指す帝国主義や植民地支配において大きな役割を担ったのである。このことは、欧米の近代化過程のみならず、西欧文明の積極的な受容、欧米諸国との対等な外交関係の構築、アジア諸国の植民地化等、日本における近代化の過程を振り返ってみても明らかだろう。「国語」、のちに「日本語」という標準語の普及にメディアが大きな役割を果たしたことはもちろんだが、ナショナルな境界を作り上げる過程で、対外的だけでなく国内的にも各地の「方言」を排除・抑圧していく上で「翻訳」は政治と強く結びついていた(坪井, 2007; 安田, 2000)。

グローバル化の2面性は、グローバル化が情報伝達技術の発展と深い関わりを持つ以上、「コミュニケーション」の歴史や概念<sup>6</sup>とも深く関わる。18世紀の西欧における啓蒙運動や産業革命、19世紀帝国主義の時代を経て、「コミュニケーション」の概念は物のやりとり(商業的なやりとり)から、人や情報・メッセージのやりとりへと変化していった。それに伴って、コミュニケーションの場もナショナルな空間からグローバルな空間へと広がることになる。実際に、産業革命によって実現した道路や鉄道網、通信ネットワークの整備は、国内経済システムだけでなく、19世紀の戦争のあり様を大きく変化させ、前線との連絡や軍隊動員に情報の共有が果たす役割、つまりコミュニケーションの役割が大きく注目されるようになる(Mattelart, 1996)。このようにコミュニケーションの発展の歴史もまた、近代の国民国家の成立と帝国主義・植民地支配の確立を反映するものであり、ナショナルとグローバルの両側面を有する。

このグローバル化のグローバルな側面とナショナルな側面の共存という現象は、近代だけのものではない。確かに、現代におけるグローバル化は、従来の国民国家という枠組みを大きく揺るがす契機であり、政治、経済、文化、社会の様々な活動における領域性が解体する過程を生み出し、「ヨーロッパ中心的な思考と近代科学の普遍性への批判が急速に台頭」(伊豫谷, 2002, p. 39)する結果をもたらした。しかし他方で「欧米を基準とする規範や様式、制度や機構、さらに文化までもが、これまで以上に強力に世界的に浸透し」、「国家は、こうしたグローバル化の浸透を促すように再編・強化されてきている」(ibid., pp. 38-39)。グローバル化の両義性は過去のものではないのである。

Venuti(1998, pp. 159-160)は、英語圏、特にその主要国である英米の優位性がもたらす英語のグローバル化、言い換えると世界が英語圏の文化的産出物のための市場と化すことが、翻訳に様々な問題を引き起こしているとは指摘する。第2次世界大戦以来の世界における翻訳の在り方は英語圏の文化の圧倒的な優位を示してきた。英語は世界で最も多く翻訳されてきた言語である。英米両国の出版産業は規模でもかなり大きく、技術的にも充実し、財政的な安定性があるにも関わらず、英語以外で書かれたテキストが英語に翻訳されることは極めて少ない。この状況に拍車をかけているのが、英語圏で重視されている翻訳方略である受容化方略であり、そこでは読者にとって読みやすく、読者が読むものがまるで自分の国の言語で書かれているような印象を与える翻訳が規範となっている(Venuti, 2008 [1995])。メディアによって産出される報道記事やニュースについても同様のことが言える。欧米優位の情報流通の中でも、英語で発信される情報は翻訳を介して世界に流布するが、それ以外の言語、中でも少数言語や地域言語で発信される情報はほとんど翻訳されない。Cronin(2003)が、翻訳と政治の関係について、グローバル化という均質化を引き起こす新たな植民地主義を指摘している点とも関わるが、グローバル社会では少数言語による情報は埋没してしまう傾向にある。ここにもグローバル化の2面性が翻訳に影響している。

以上、グローバル化を近代から現代への歴史の流れの中で考察し、グローバル化が近代の国民国家の成立と帝国主義・植民地支配の確立を背景として展開し、その結果、情報流通の不均衡とグローバル化の2面性を生じさせ、現在にまでそれは引き継がれていること、そしてそこに翻訳が関わっていることを確認した。次節では、ここまで自明のものとして使用してき

た「メディア」と「翻訳」という言葉について概観し、その上でグローバル化社会におけるメディア翻訳という言語行為の特徴を描き出し、次章でメディア翻訳における不可視性と等価の問題を考察する前提としたい。

#### 4.3 グローバル化社会におけるメディア翻訳

「メディア」は、英語では“media”であり、“medium”の複数形である。“medium”の語源はラテン語“medium”または“medius”で「中間」を意味するものであった。英語として使われ始めたのは16世紀で、その後「17世紀初期までに介在的もしくは中間的な働きを意味するようになった」(吉見, *op. cit.*, p. 5)。この時期のメディアの概念は、物質的、心的な媒介から神と人間、精神と世界の媒介まで含むものであった(*ibid.*)。ここでは現在の用法のような伝達手段に限定されていなかった。それが19世紀以降の情報技術の発展によって、もとの意味である媒介・仲介としてのメディア概念が薄らぎ、20世紀を通しメディアとは送り手から受け手へのメッセージを伝達する媒介手段であるという考えが広がっていく。この考え方を支えたのが、先にも述べた情報理論的コミュニケーション観である。メディアとは情報媒体、つまり情報伝達の機器そのものであり、その媒体を通して伝達される情報(メッセージ)とは明確に区別されるようになった。それゆえに、メディアが有する「透明性」が強調され、メディアはコミュニケーションの技術的前提ではあっても、メッセージの内容には関わらないものと捉えられた(*ibid.*, p. 6)。ところが、1960年代になると、このようなメディアの透明性に疑問が投げかけられるようになる。メディア論に新しい地平をもたらしたのは、マクルーハンの有名な「メディアはメッセージである」(マクルーハン, 1987, p. 7)という言葉である。この言葉は、メディアにおいて行われているのは、送り手から受け手への単なる意味の伝達ではなく、メディアに関与する様々な主体間で連鎖的に意味を媒介・調整していくプロセスであることを示すものであった(吉見, *op. cit.*, pp. 7-8)。そこには当然、参与主体による意味の解釈と産出があり、それによって意味が媒介されるのである。メディアに関するこのような視点は、主にカルチュラル・スタディーズを中心とする領域での議論であったが、まさに「翻訳」という概念の今日的議論と重なる。

一方の「翻訳」は英語で“translation”である。語源はラテン語の“trans”(別の場所へ)と“late”(運ぶ)である。日本語では「翻訳」は通常、書記言語を訳す行為・過程または訳出物を指し、基本的に音声言語を扱う「通訳」と区別されている。これに対し、英語の“translation”は包括的な語であり、広義では日本語の「翻訳」と「通訳」を包含する。英語でも翻訳のみを指す場合もあるが、その場合は“interpretation”と区別して使用される。動詞“interpret”はラテン語の「説明する」に由来し、語源は“inter”(～の間)と“pret”(仲介者)である。英語での“translation”と“interpretation”の2つの語に共通する意味は「解釈」である(鳥飼, 2005, p. 25)。翻訳学が欧州語圏で学問分野として成立するのは20世紀後半であるが、今日、我々が「翻訳」と呼ぶもの、そしてその実践についての議論は、古代ローマにまで遡る。翻訳学では周知のように、既に紀元前1世紀にはキケロ(Cicero)が、また紀元4世紀後半には聖ヒエロニムス(St Jerome)が、翻訳をめぐる「直訳(literal)」か「自由訳(free)」か、あるいは「逐語訳(word-for-word)」か「意味対応訳(sense-for-sense)」かで議論を展開しており、現代に至るま

で西欧における「翻訳」に関する議論の中心を成してきた(マンデイ, *op. cit.*, pp. 28-29)。これらの議論の中心は、聖書のテキストをめぐるものであり、それは神の言葉をどのように「解釈」し、それをどのように「媒介」するかという問題であった。19世紀、テキストはそれが能動的に解釈されて意味を持つと主張する解釈学(hermeneutics)が生まれた。“hermeneutics”の語は「解釈する」、「翻訳する」という意味のギリシャ語“hermeneuō”に由来する。解釈学の発展は、神の言葉、聖書というテキストを理解、解釈する方法と深い関わりを持っている。翻訳学との関連では、シュライアーマハー(Friedrich Schleiermacher)が翻訳者の姿勢として述べた以下の「著者をできるだけそっとしておいて読者を著者に近づけるか、読者をできるだけそっとしておいて著者を読者に近づけるかのどちらかの選択しかない」(Schleiermacher, 2004 [1813], p. 44)という言葉は、その後の翻訳論における根本的課題となった。解釈学は、20世紀後半の脱構築の誕生につながるとともに、翻訳学における「等価」論議を乗り越えようとする様々な試みとも深く関わっていくことになる。一方で、「等価」の概念は、翻訳学で長い間翻訳の規範として捉えられ、翻訳に関わる主体による能動的な解釈や翻訳のプロセスを背後に押しやることになる。そこでは、翻訳という行為やプロセス、そして翻訳者は、単に原文と翻訳産出物を等価的に通す道具として捉えられ、テキストの内容には関与しない存在、したがって透明な存在として捉えられることになる。こうして「等価」という(メタ言語的)規範が、翻訳実践に強力に作用してきたのである。

翻訳学では、その後70年代頃から語用論、社会言語学、社会学等の研究成果を受け、ミクロ及びマクロ・レベルでの翻訳テキストの生成と受容を、文化的・社会的コンテキストの中で捉えていこうとする研究が、特に文学の領域で発展を見せた。その結果、それまで主流だった規範を研究するアプローチから、翻訳の現象を記述するアプローチへと研究の中心的課題も変化していくことになる。このようなアプローチでは、翻訳は、起点テキストから目標テキストへの単なる意味伝達手段でなく、意味を媒介する翻訳プロセスとして捉えられる。また翻訳者等、翻訳プロセスに関わる参加者が、テキスト生成に関わる主体として浮かびあがってくる。さらに翻訳学における大きな転換期となる「文化的転回」につながる過程においては、他の学問領域から「翻訳」についてのより一般的な、より抽象的な概念が様々な形で翻訳学にもたらされた。それは起点テキスト及び目標テキストの不確定性、あるいは人類学で言う「文化の翻訳」のように物や形としての起点テキスト自体の不在を前提とするものであった。

ここで再び「翻訳」と「メディア」の概念が重なり合ってくる。メディアは、その仲介過程において有限の言語的テキストのみに焦点を当てるものではない。その意味で、ピム(2010, p. 248)が「翻訳不在の翻訳」として言及する文化翻訳のひとつの形態と言える。周知のように、Jakobson(2004 [1959], p. 139)は、翻訳を以下の3つ、すなわち、「言語内翻訳(intralingual translation)」、「言語間翻訳(interlingual translation)」、「記号間翻訳(intersemiotic translation)」に分類し、この3つのうち言語間翻訳を「本来の翻訳」と位置づけた<sup>7</sup>。ピムの言う「翻訳不在の翻訳」とは、この従来の伝統的な翻訳概念である言語間翻訳という意味での「翻訳」がないことを指す。つまり、安定した起点テキストがあるかどうかを別にすれば、翻訳もメディアも共に、テキストの「解釈」と「産出」に主体的に関わる媒介・仲介行為であり、過程であり、

「メディア」とは広い意味での「翻訳」であるとも言える。メディアにおいて解釈され、その結果意味を成すものとなったテキスト(産物)は、言うなれば現実の出来事の翻訳であり、その翻訳の過程にはジャーナリストをはじめとする様々な主体間で連鎖的に意味を媒介・調整していく行為があるとみなせる。現代という時代におけるメディア翻訳とは、様々な時間・空間で生起する出来事についての解釈が行われる時点から、最終的な翻訳物であるテキストとなって読者や視聴者が受け取るまで「翻訳」という言語行為が繰り返される場なのである<sup>8</sup>。その意味で、近現代のグローバル化を背景とするメディア翻訳とは、翻訳学で「翻訳」という語が通常意味する、起点言語で書かれた言語テキスト(起点テキスト)から目標言語で書かれる言語テキスト(目標テキスト)へという過程に関わる相互行為はもちろん、ある出来事が解釈されて(翻訳されて)起点テキストとなる過程に関わる相互行為も含む言語行為ということになる。

## 5. メディア翻訳研究の今日的課題

### 5.1 翻訳の不可視性: 求められる記号論的視点

前章では、グローバル化におけるメディアと翻訳の概念の重なりを検討した上で、グローバル化を背景とするメディア翻訳が、出来事の解釈から始まる一連の翻訳という媒介過程として捉えられることを示した。これに対し、従来の国際報道に対する人々の認識を支えてきたのは、冒頭でも述べた通り、情報理論的コミュニケーション観、つまり単なる媒介装置、言わば「導管(duit)」としてのメディア観、翻訳観である。そこでは、メッセージ(テキスト)は所与のものであり、メディアも翻訳も単なる情報伝達として捉えられる。結果として、メディア翻訳の実践はほとんど人々の意識に上らず、その姿は不可視のままである。このようなコミュニケーション観はまた、翻訳学におけるメディア翻訳研究の遅れの原因となっている点についても前述した通りである。「文学(=創造・主観・価値)」対「報道(=事実・客観・情報)」という西欧近代的な2項対立的思考は翻訳学においても大きく作用し、後者の翻訳における「等価」は問題にさえならないほど当然のことと考えられてきた。メディアで伝えられることは、客観的な「事実」、「現実」であり、したがって翻訳も客観的、中立的、技術的なものであり、メディア翻訳に課されているのは、起点となるメディアテキストの忠実な再現ということになる。逆に言えば、「等価」が問題となるのは、特に文化的価値に焦点が当てられるコンテキスト、つまり文学的コンテキストにおける創造的な営みについてなのである。その結果、メディア翻訳は、文学作品の「等価」の問題に焦点化した翻訳論からは排除され、近年まで研究の対象とならなかったと言える。

1970年代から80年代にかけて、翻訳学でも機能主義的言語学理論の影響の下、コミュニケーション重視の機能主義的アプローチがドイツで盛んになる。ライス(Katharina Reiss)は、それまで翻訳学で主流だった単語や文のレベルの「等価」ではなく、テキスト・レベルでの「等価」が追究されるべきだとして、起点テキストの目的と機能を重視したテキスト・タイプ別翻訳方略を提示した。Reiss(2000 [1971])は、テキストのタイプによって優勢となる機能に差があると考え、どのような機能がそのテキストで優勢なのかにより、テキストを以下の3つに分類した。すなわち情報型テキスト、表現型テキスト、効力型テキストの3つのタイプである<sup>9</sup>。情報型テキストで優勢な言語機能は「叙述機能」であり、そこでは伝達内容レベルでの正確性、等価が求められると

した。このタイプの典型が、ニュース報道、学術書、公文書などである。それに対し、表現型テキストで優勢な言語機能は「表出機能」であり、芸術表現レベルでの等価が要請される。このタイプの代表はもちろん文学作品である。効力型テキストにおいて優勢なのは、受け手に対し何らかの行為を働きかける「訴え機能」であり、訴え効果のレベルでの等価が求められるとする。このタイプのテキストの例は、宣伝、広告などである。その後、言語以外の媒体が関わる場合として、第4のテキスト・タイプであるマルチ・メディア型テキストが加えられた。マルチ・メディア型では、上記3つの機能のどの機能が優勢かで、さらに3つの下位レベルが設けられている(藤濤, 2007, pp. 18-25)。本稿との関連でいえば、メディア翻訳とは、まさに情報型タイプ、あるいはマルチ・メディア型の情報型タイプであるということになる。ここで求められるのは、情報というメッセージ(テキスト)をその伝達内容を変えずに正確に伝えること、すなわち言及指示的内容の等価を達成することである。このようにメディア翻訳は、情報理論的モデルに則ったコミュニケーションとして捉えられ、新聞記事やニュースではもっぱら言及対象の叙述機能だけが注目され、表出機能や訴え機能、言い換えると社会指標的機能面での等価については十分考慮されることがなかった。

さらに、スコポス理論、すなわち目標言語側の「目的(skopos)」を重視する翻訳理論で、メディアの翻訳における受容化方略が正当化されることになる。メディアにおける翻訳行為の存在が、ほとんど人々の意識にのぼらない要因として挙げられるのは、前述のように世界の情報を独占的に支配している国際通信社では、ニュースの産出において言語の多様性に対処しながら各国言語でニュースを配信するという作業において、翻訳が重要な役割を果たす一方で、翻訳がジャーナリストの作業と切り離して認識されていない点である。さらに、受け手にとっての読みやすさに価値を置くため、翻訳の介在を隠蔽する受容化方略を採用する結果、二重の意味で翻訳行為は不可視であるという(Bielsa, 2007, p. 151)。これはメディア全体に共通する問題でもある。加えて、前述した通り現在のメディアは、様々な記号形態をとり、書記言語と音声言語、さらに写真や映像など非言語記号が混在している。とりわけ映像は、「現実」を構築する上で大きな影響力をもつ記号である。

このようにメディア翻訳の不可視性は、一方で従来の情報理論的コミュニケーション観、そこにおける媒体を通じたメッセージの「等価」的伝達という前提、加えてメディアにおける目標テキスト重視の読みやすい翻訳という規範・方略、他方で従来の言語間翻訳に留まらないメディア翻訳行為の複雑な実践がその背景にある。以上の考察からメディア翻訳の多様性を考察するには、従来の「言語間翻訳」という枠組みを超えその視点を「言語間翻訳」から「記号間翻訳」へと広げて検証する必要性が問われていると言えるだろう。そして、メディア翻訳の不可視性という問題に迫るためには、情報理論的コミュニケーション観に代わる社会・文化的コンテキストを射程に持つコミュニケーションモデルからの検証が必要となることもここまでの議論で明らかであろう。このような視座と枠組みを翻訳学に与えてくれるひとつとして、哲学者パーズ(Charles Sanders Peirce)によって考案され、その後ヤコブソン(Roman Jakobson)によって言語学・文学研究に接合された記号論(semiotics)をその理論的中核とする社会記号論系言語人類学の「出来事モデル(event model)」が考えられる。これについては、6章で詳しく述べる

こととし、その前に、次節でメディア翻訳を考察する上でもうひとつ重要な課題である翻訳学における「等価」をめぐる議論について考察する。

## 5.2 「等価」をめぐる議論を超えて: 翻訳行為(語用)の2側面

翻訳学がひとつの独立した学問分野として本格的に始動してから今日まで、とりわけ 1990年代以降、翻訳研究は飛躍的な展開を見せ、急速に多様化・学際化が進んでいる。この学際性は最近の翻訳研究の顕著な特徴である(マンデイ, *op. cit.*, p. 20)。一方で、こうした翻訳学の多様化と学際化によって翻訳学内の分裂化の可能性も指摘される状況だが、それは単純化して言うなら、言語理論と文化理論との間の緊張に主に起因する。新たな視点、例えばジェンダー研究、ポストコロニアル研究、社会学、歴史学等の視点が翻訳学にもたらされ普及した結果、翻訳学としての共通の基盤があるのか、あるとすればそれは一体何かという問題も提起されている(*ibid.*, p. 323)。しかし、言語理論と文化理論を中心とするこの2つの潮流は、対立というより、言語使用の異なる側面に焦点を当てるものである。前者は、翻訳学が伝統的に依拠してきた言語学の諸領域、つまり、構造言語学、対照言語学、機能主義言語学、談話分析、語用論、社会言語学等の枠組みの中で発展したものである。それに対し、後者は、1970年代以降、特にポスト構造主義、脱構築、そしてこれらの潮流と深い関わりを持つ近年のポストコロニアル研究等を含むカルチュラル・スタディーズ、人類学、社会学、歴史学等、言語学の外で発展してきた広範な学問領域、知的潮流との関係・交流を通して展開してきたものである。前者は言語学に基盤を置くことから、体系性・規則性を重視する。それに対し後者は経験的な多様性・歴史的固有性を志向する。しかし、両者は対立するものではない。文化理論と呼ばれる思想や学問領域のいずれもが、言語理論(構造主義)にその契機があったことを考え合わせるとこの点が明らかになる。ここで文化理論と呼ばれているものは、経験的な多様性・歴史的固有性、すなわち語用の指標的側面を理解することの重要性を提起しているのであり、この側面の理解を欠き、体系性・規則性、つまり言語体系(ラング)や語用の言及指示的側面にのみ焦点化した理論に対して疑問を投げかけているのである(cf. 坪井, 2011)。

言語は言語構造(ラング)と語用(パロール)から成るが、翻訳学における等価をめぐる初期の議論は、もっぱら言語構造の意味範疇に焦点化したものであったと言える。その後の語用論を枠組みとする翻訳研究も、特に英米の意味論的伝統に大きく依拠してきた。つまり、ハリデーの機能主義的言語学やグライス理論、さらに関連性理論等にその基盤を置いて展開してきたということである。そこでは、確かに社会指標的機能も部分的に扱われたが、研究の中心は言及指示機能にあり、語彙、句、節等「意味」を担っている要素が、コンテキストにおいて示している機能や推意などを中心に扱うものであった。語用には、言語的な意味に関わる言及指示的機能のみならず、言語的に明示化されずに前提とされる文化的背景・信条等、歴史的・社会的コンテキストを指標する、言い換えると、言語使用者のアイデンティティや権力関係、イデオロギー等に関わる社会指標的機能があるわけだが、これまで翻訳学での「等価」議論は、言語体系における意味の等価、あるいは語用の言及指示的側面での等価に留まってきた。その結果として、語用における社会指標的側面が捨象される傾向にあった。一方、例えばポ

ストコロニアル翻訳理論では、それまで翻訳論で背景に押しやられていた語用の社会指標的側面に注目し、翻訳行為における権力やアイデンティティに焦点が据えられた。しかし、そこでは言及指示的側面と社会指標的側面の両者の多層的な絡み合いを視野に入れながら、言語あるいは言語を含む文化以外の様々な要素(政治や経済等)を包み込む議論が展開されてはこなかった。このように、翻訳学における2つの大きな潮流はある部分では重なりつつも、言語行為の異なる側面を議論してきたのであり、そこに溝が生じる原因があると言える。しかし、言語行為として翻訳を検証しようとするなら、言語理論と文化・社会理論の両方の視座が必要となる。

ヤコブソンの言う本来の翻訳、すなわち言語間翻訳は、異なる言語体系に属する言語間の翻訳を指すが、言語相対論をそのまま受け入れるのであれば、厳密な論理的な意味での翻訳は不可能である。しかし翻訳という実践は存在して、その実践は異文化間の理解とコミュニケーションにとって意味のあるものと考えられている。その実践が目指すものは、等価への限らない近似、つまり近似性・類似性へのあくなき追求である。それが、言語間における実践的な「解釈」であり、「理解」である。我々は、日常生活で同じ言語間においても、また異なる記号間においても、同様の行為を繰り返しながら生活している。我々の日常生活とはこのような、メタ言語的、メタ記号的、すなわちメタ語用的な記号の解釈過程の連続である。言語間翻訳が言語内翻訳と違うのは、前者が異なる言語構造、言語体系の間で起っている点である。また言語間翻訳が記号間翻訳と違うのは、前者が「言語」という同じ記号間で起っている点のみである。いずれにしても、そこでは限らない可能性の選択肢の中から、等価に近いものを求めて解釈が行われる。解釈とはこの「等価」を希求する過程とも言える。メディア翻訳もまたこのような解釈の場であり、そうであるならその現象を記述し、検証するためには、言及指示的側面と社会指標的側面の両方を射程に収める視座が必要となることは明らかだろう。そのひとつの可能性として、5.1で導入した現代社会記号論系言語人類学の枠組みがある。

## 6. 現代社会記号論系言語人類学の可能性と今後の展望

シルヴァステイン(Michael Silverstein)に代表される現代社会記号論系言語人類学は、ボアス(Franz Boas)に端を発する現代人類学(特にその一端を担う言語人類学)と、ヤコブソンによって言語学・文学研究に接合されたパースの記号論(semiotics)<sup>10</sup>との交点に位置する(小山, p. 2009, p. 45)。言語人類学が、言葉とコミュニケーションを切り口とし、社会・文化の全体を探究しようとする学問であり、他方で、記号論が、自然科学が対象とする世界をはじめ、それを取り巻く社会・文化をも含む「宇宙」全体を記述・理解しようとする学問であることから、その交点に展開するこの学問は、「言語やコミュニケーションを通して、『自然』や社会、文化、その全体に迫ろうとする宇宙論的(cosmographic)なアプローチ」(ibid., p. 46)を特徴としている。その意味で社会記号論系言語人類学が射程とする領域は非常に幅広く、その理論も複雑であるが、以下で社会記号論系言語人類学の基本的な特徴と理論に絞り概説し、メディア翻訳学への応用可能性を提起する。

言語人類学の中核を成す記号論は、象徴記号(symbols)のみならず類像記号(icons)、指

標記号(indexicals)<sup>11</sup>など多様な記号の全体として世界を構想、認識する一般的な枠組み・体系として構築された(ibid., p. 33)。この点が、象徴記号としての言語を軸として文化を構想するソシュールの記号学(semiology)とは異なる。パースの記号論的世界には、その中心に「指す」・「指される」過程(記号作用)という、歴史的・社会的、文化的な空間で生起する「出来事」があり、全ての現象は、この記号作用によって「存在」する。このパースの記号論と、ボアス、サピア(Edward Sapir)、ウォーフ(Benjamin Whorf)そして、「ことば(コミュニケーション)の民族誌」のHymes(1964)、「談話分析」のGumperz(1982)等によって受け継がれてきた「全体性」への希求・志向との接合が、社会記号論系言語人類学の基底を成すものであり、その特徴となっている。

Silverstein(1976)は、記号論に依拠し、コミュニケーションを指標的な「出来事」として、言語行為を含むコミュニケーションには、何かについて「言われていること(what is said)」「言及指示的機能」だけでなく、コンテキスト依存性が極めて顕著な「為されていること(what is done)」「(社会)指標的機能」という2つの側面があるとして概念化を行った。これが、出来事モデルである。出来事モデルにおいては、コミュニケーションは常にコンテキストにおいて生起する社会的な行為・出来事と捉えられる。そこでは、コミュニケーションはオリゴ(deictic center, 相互行為の中心、コミュニケーションにとっての「今・ここ」)を基点とし、ミクロ(行為・出来事、参加者、場)から、マクロ(参加者の帰属集団・権力関係などの社会背景、世界観などの信念体系・文化的知識)まで、同心円状に広がる多層的な歴史・社会・文化的コンテキストで生起するテキスト化([en]textualization)とコンテキスト化(contextualization)の相互過程として構想される。コミュニケーションはその出来事を取り巻く参加者の相互行為の中で社会的に「意味」が「決定」されていくのであり、意味はもともと内包されたものではなく、コミュニケーションの記号作用を通して、意味が規定されていく。つまり、もともとは無限の解釈の可能性のある「今・ここ」の出来事の意味は、特定のコンテキストを前提的に指し示すこと(コンテキスト化)によって、言い換えるとメタ語用的な枠組みが喚起されることによって、コミュニケーションの参加者にとって解釈可能な出来事となる(テキスト化)。コミュニケーションの参加者が、無限の解釈可能性の中から何らかの解釈をすることができるのは、「今・ここ」で生起する出来事が無数に放つ「指標の矢(indexical arrow)」を「統制(regiment)」する機能が働くからである(Lucy, 1993; Koyama, 1997; Silverstein, 1993)。この機能が、「メタ語用(metapragmatics)」である。言い換えると、コミュニケーション出来事というコンテキスト化とテキスト化の過程は、語用についての語用、つまり「メタ語用」によって生成される過程ということになる。このメタ語用的過程、テキスト化の過程こそが、解釈である。一方、ここで生起したテキストは、新たなコンテキストを創出する(コンテキスト化)と同時に、後続する出来事によって再テキスト化されていく。こうしてコミュニケーション(相互行為)は、その歴史、文化、社会的な意味を変容させつつ、最終的な決定性を欠いた形で、再構成されることが繰り返されると捉えられる(小山, 2008, 2009; Silverstein, 1992)。

前章までで考察したように、グローバル化を背景としたメディア翻訳とは、まさにこのようなコミュニケーション行為・出来事であり、解釈、テキスト化、メタ語用の織りなす多層的な過程であると言える。ここに社会記号論系言語人類学の理論的枠組みとコミュニケーションモデルを基

盤とするメディア翻訳研究の新たな可能性が開かれる。Silverstein (2003) は、言語人類学の視点から、翻訳という言語行為について以下のように指摘する。すなわち、西欧のメタ語用論的伝統においては、人間の言語に対する意識(言語イデオロギー)が言語構造や語用の言及指示的機能に向きやすいことを反映し、研究も言及指示的側面に集中してきたが、その西欧において発展した翻訳理論においてもまた同様に、翻訳という言語行為の言及指示的側面の等価性にもつばら焦点が当てられてきた。しかし語用にはコンテキストに関わる社会指標的機能の側面があるのであるから、翻訳実践もこの指標的側面を考慮することが重要だとする(ibid.)。前章で明らかにしたように、等価の議論は言語行為の両側面を考慮することによって現代的意義を持つ。特にグローバル化におけるメディア翻訳という現代の権力関係が大きく影響する場にあつては、社会指標的側面における等価の議論が必須である。そこにも、言語人類学の有用性がある。

メディア翻訳は、現代のグローバル社会において異なる言語、異なる文化の狭間にあつて、異なる「他者」への共感を育み、多文化の共存を目指す異文化コミュニケーションの課題にとって大きな役割を担う。しかし、本稿で考察してきたように、グローバル化は近現代の世界の権力関係を背景として展開してきた現象であり、その中で展開するメディア翻訳もまた社会・文化的、歴史的コンテキストで生起する多層的な実践である。ここにこそメディア翻訳という実践とその研究の今日的課題がある。従来の情報理論的コミュニケーション観や言語の言及指示的機能にのみ焦点を置いた「等価」という捉え方ではメディア翻訳のこの課題は見えてこない。翻訳学におけるこれまでの研究成果に立脚しつつも、本稿で提起した社会記号論系言語人類学の理論的枠組みとコミュニケーションモデルを応用・援用することを通して、より幅広く多角的な視点からグローバル社会におけるメディア翻訳の様々な実践・現象が追究され、明らかにされることによって、これからの国際社会、異文化コミュニケーションの課題に果たすべきメディア翻訳の役割や責任についての議論にも展望が開けてくるのではないだろうか。そこからまた新たな理論的枠組みの課題も浮かびあがってくることになる。

#### 【註】

1. 「メディア翻訳」という用語の詳細については 3 章で取り上げるが、本稿では、基本的に主にマス・メディア、すなわち新聞、雑誌、ニュース、ドキュメンタリー等、メディアを介して発信される報道に関わる翻訳という狭義の意味で使用する。
2. 欧米社会で客観報道の様式が誕生するのは、19 世紀末から 20 世紀初頭と言われる。近代国民国家の形成とマス・メディアの発達・普及とは互いに深い関わりがあるが、近代化過程においてニュースの信頼性を保証する上で不可欠な要件となったのが客観報道(主義)であった(大石・岩田・藤田, 2000, p. 24)。その後、この報道様式は、第 1 次世界大戦中の大規模な宣伝にメディアが動員・操作されたことで再考を迫られ、実際の出来事と、報道によって社会的に構築される「社会的現実」との差異に対する認識が高まっていくことになる(大石, 2005, pp. 67-68)。
3. 新聞、雑誌、テレビ、ラジオなどのメディアでは、「オープン・チャンネル」などを例外として、一般的には、情報、特に報道に関わる情報を、特定少数の送り手から、不特定多数の受け手に発信す

る。それに対し、インターネットでは、複数の送り手と複数の受け手の間で情報がやりとりされる。そのためネットワーク・メディアとも呼ばれるが、不特定多数の受け手に情報を発信するウェブ・サイトは、マス・メディアに近い機能を持つ。

4. 日本では「映像翻訳」と呼ばれることが多い。ここにはドキュメンタリーやテレビニュースも含まれる。実際には、映画やテレビドラマなどフィクション分野の翻訳を指すことも多く、その分野の翻訳をメディア翻訳と同義で使用している場合もある。

5. 文化帝国主義批判やメディア帝国主義批判に現れているように、このような不均衡な情報流通を通して、経済的に強い国の文化や価値観が第3世界を中心とする弱い国に浸透することにより、文化的支配・被支配という新たな文化対立を生み出しているという議論が提起されている(cf. サイード, 1998, 2001; Tomlinson, 1991)。

6. 「コミュニケーション(communication)」の語源は、ラテン語で「共通の」「共有の」を意味する「コムニス(communis)」と言われる。コミュニケーションの定義は多種多様であるが、基本的に、伝達によってメッセージや情報が「共有される」という相互的な過程が想定されている。

7. Jakobson(2004 [1959])の論稿で留意すべきもう一点は、言語間翻訳における重要な問題、つまり異なる言語における単語間の「意味における等価(equivalence in meaning)」について問題を提起したことである。ヤコブソンがここで述べる「等価性」とは「相対的等価性」である。ヤコブソンの主要な論点は、文法等、この相対性に関与する変数を分析する必要があるという主張にある。

8. 産出物としての翻訳は、読者・視聴者によってさらに、解釈・翻訳し直される。メディア翻訳とは、このように延々とテキスト化(解釈・翻訳)が繰り返される過程である。

9. ライスの3分類のもとになったのは、Bühler(1982 [1934])の言語機能に関する3分類(オルガンオンモデル)で、言語機能を叙述、表出、訴えの3機能に分けて考察したものである(藤濤, 2007, pp. 19-20)。これが後にヤコブソンの6機能モデルに展開する。そこに加えられた「メタ言語」機能こそが翻訳の問題の中心にあることを示したのが Jakobson(2004 [1959])による翻訳論である。

10. 翻訳学との関連について、Jakobson(2004 [1959], p. 139)は、「いかなる言語学的記号の意味も、その先にある何らかの代替的記号への翻訳である」と述べ、翻訳がその意味を解釈によって能動的に創出するものであることを示した。これは、言語的記号の意味は、その記号が関わるメタ言語的(メタ意味論的、あるいはメタ語用的)操作(過程)の総体であるというヤコブソンの構造言語学のテーゼとも言えるものである。翻訳の過程とは、このようなメタ言語的操作の過程と言える。

11. 類像記号は類似性の原理、指標記号は隣接性・連続性の原理に基づく指示であるのに対し、象徴記号は指示関係が経験的な根拠を持たない象徴的なものである。

.....

【著者紹介】

坪井睦子(TSUBOI Mutsuko) 立教大学大学院博士後期課程修了(異文化コミュニケーション学)。明治学院大学非常勤講師。専門は翻訳学。メディア翻訳の相互行為性と異文化コミュニケーションにおけるその役割と課題について、言語人類学の視座から研究に取り組んでいる。mtsuboi3@gmail.com

.....

## 【参考文献】

- アンダーソン, B. (1997)『増補 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』(白石さや・白石隆・訳)NTT 出版[原著:Anderson, B. (1983). *Imagined communities: Reflections on the origin and spread of nationalism*. London: Verso].
- Baker, M. (2006). *Translation and conflict: A narrative account*. New York: Routledge.
- Bielsa, E. (2007). Translation in global news agencies. *Target*, 19(1), 135-155.
- Bielsa, E., & Bassnett, S. (2009). *Translation in global news*. London: Routledge.
- Bühler, K. (1982 [1934]). *Sprachtheorie: Die Darstellungsfunktion der Sprache*. Stuttgart: Gustav Fischer.
- Cronin, M. (2003). *Translation and globalization*. London: Routledge.
- Díaz-Cintas, J. (Ed.). (2009). *New trends in audiovisual translation*. Bristol: Multilingual Matters.
- Díaz-Cintas, J., & Anderman, G. M. (Eds.). (2009). *Audiovisual translation: Language transfer on screen*. New York: Palgrave Macmillan.
- Franco, E. P. C. (1998). Documentary film translation: A specific practice? In A. Chesterman, N. G. S. Salvador & Y. Gambier (Eds.), *Translation in context: Selected contributions from the EST congress, Granada 1998* (pp. 233-242). Amsterdam: John Benjamins.
- 藤濤文子 (2007)『翻訳行為と異文化コミュニケーション—機能主義的翻訳理論の諸相—』松籟社
- Gambier, Y. (2003). Introduction—Screen translation: Perception and reception. *The Translator*, 9(2), 171-189.
- Gambier, Y. (Ed.). (1998). *Translating for the media: Papers from the International Conference Languages & the Media, Berlin, November 22-23, 1996*. Turku: University of Turku Centre for Translation and Interpreting.
- Gambier, Y., & Gottlieb, H. (Eds.). (2001). *(Multi)media translation: Concepts, practices, and research*. Amsterdam: John Benjamins.
- Gumperz, J. (1982). *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gutt, E-A. (2000). *Translation and relevance: Cognition and context* (2nd ed.). Manchester: St Jerome.
- Holland, R. (2006). Language(s) in the global news: Translation, audience design and discourse (mis)representation. *Target*, 18(2), 229-259.
- Hymes, D. (1964). Introduction: Toward ethnographies of communication. *American Anthropologist*, 66(6), 1-34.
- 伊藤守 (編) (2006)『テレビニュースの社会学: マルチモダリティ分析の実践』世界思想社
- 伊豫谷登士翁 (2002)『グローバリゼーションとは何か: 液状化する世界を読み解く』平凡社
- Jakobson, R. (2004 [1959]). On linguistic aspects of translation. In L. Venuti (Ed.), *The*

- translation studies reader* (2nd ed.) (pp. 138-143). New York: Routledge.
- Kang, J-H. (2007). Recontextualization of news discourse: A case study of translation of news discourse on North Korea. *The Translator*, 13(2), 219-242.
- Koyama, W. (1997). Desemanticizing pragmatics. *Journal of Pragmatics*, 28, 1-28.
- 小山亘 (2008)『記号の系譜: 社会記号論系言語人類学の射程』三元社
- 小山亘 (2009)「シルヴァステインの思想: 社会と記号」小山亘 (編)『記号の思想: 現代言語人類学の一軌跡—シルヴァステイン論文集』(11-233 頁) 三元社
- 小山亘 (2011)『近代言語イデオロギー論: 記号の地政とメタ・コミュニケーションの社会史』三元社
- Lucy, J. A. (Ed.). (1993). *Reflexive language: Reported speech and metapragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mattelart, A. (1996). *The invention of communication* (S. Emanuel, Trans.). Minneapolis, MN: University of Minnesota Press. (Original work published 1994)
- マクルーハン, M. (1987)『メディア論: 人間の拡張の諸相』(栗原裕・河本仲聖・訳) みすず書房 [原著: McLuhan, M. (1964). *Understanding media: The extensions of man*. New York: McGraw-Hill].
- メイ, J. L. (2005)『批判的社会語用論入門—社会と文化の言語』(小山亘・訳) 三元社 [原著: Mey, J. L. (2001). *Pragmatics: An introduction* (2nd ed.). Oxford: Blackwell].
- マンデイ, J. (2009)『翻訳学入門』(鳥飼玖美子・監訳) みすず書房 [原著: Munday, J. (2008). *Introducing translation studies: Theories and applications* (2nd ed.). London: Routledge].
- 大石裕 (2005)『ジャーナリズムとメディア言説』勁草書房
- 大石裕・岩田温・藤田真文 (2000)『現代ニュース論』有斐閣
- Orero, P. (Ed.). (2004). *Topics in audiovisual translation*. Amsterdam: John Benjamins.
- ピム, A. (2010)『翻訳理論の探求』(武田珂代子・訳) みすず書房 [原著: Pym, A. (2010). *Exploring translation theories*. New York: Routledge].
- Reiss, K. (2000). *Translation criticism, the potentials and limitations: Categories and criteria for translation quality assessment* (E. F. Rhodes, Trans.). Manchester: St Jerome. (Original work published 1971)
- サイード, E. W. (1993)『オリエンタリズム』(板垣雄三・杉田英明・監修、今沢紀子・訳) 平凡社 [原著: Said, E. W. (1978). *Orientalism*. New York: Georges Borchardt].
- サイード, E. W. (1998)『文化と帝国主義 1』(大橋洋一・訳) みすず書房 [原著: Said, E. W. (1993). *Culture and imperialism*. New York: Alfred A. Knopf].
- サイード, E. W. (2001)『文化と帝国主義 2』(大橋洋一・訳) みすず書房 [原著: Said, E. W. (1993). *Culture and imperialism*. New York: Alfred A. Knopf].
- Schäffner, C., & Bassnett, S. (Eds.). (2010). *Political discourse, media and translation*. Newcastle: Cambridge Scholars Publishing.

- Schleiermacher, F. (2004). On the different methods of translating (S. Bernofsky, Trans.). In L. Venuti (Ed.), *The translation studies reader* (2nd ed.) (pp. 43-63). New York: Routledge. (Original work published 1813)
- Silverstein, M. (1976). Shifters, linguistic categories, and cultural description. In K. H. Basso & H. A. Selby (Eds.), *Meaning in anthropology* (pp. 11-55). Albuquerque, NM: University of New Mexico Press.
- Silverstein, M. (1992). The indeterminacy of contextualization: When is enough enough? In P. Auer & A. di Luzio (Eds.), *The contextualization of language* (pp. 55-76). Amsterdam: John Benjamins.
- Silverstein, M. (2003). Translation, transduction, transformation: Skating “glossando” on thin semiotic ice. In P. G. Rubel & A. Rosman (Eds.), *Translating cultures: Perspectives on translation and anthropology* (pp. 75-105). New York: Berg.
- Snell-Hornby, M. (1988). *Translation studies: An integrated approach*. Amsterdam: John Benjamins.
- 鈴木正行 (2005)『日本の新聞におけるアフリカ報道:マクブライド委員会報告の今日的検証—外国通信社への記事依存度の変遷を視座にして—』学文社
- Tomlinson, J. (1991). *Cultural imperialism: A critical introduction*. London: Pinter.
- 鳥飼玖美子 (2005)「通訳における異文化コミュニケーション学」井出祥子・平賀正子 (編)『講座社会言語科学第1巻 異文化とコミュニケーション』(24-39頁)ひつじ書房
- Toury, G. (1995). *Descriptive translation studies and beyond*. Amsterdam: John Benjamins.
- 坪井秀人 (2007)「みずからの声を翻訳する—『アイヌ神謡集』の声と文字」西成彦・崎山政毅 (編)『異郷の死: 知里幸恵、そのまわり』(83-117頁)人文書院
- 坪井睦子 (2011)「『等価』再考—『翻訳理論の探求』に探る翻訳学の新たな可能性—」『異文化コミュニケーション論集』第9号: 129 - 138.
- Venuti, L. (1998). *The scandals of translation: Towards an ethics of difference*. New York: Routledge.
- Venuti, L. (2008 [1995]). *The translator's invisibility: A history of translation* (2nd ed.). London: Routledge.
- 安田敏朗 (2000)『近代日本言語史再考: 帝国化する「日本語」と「言語問題」』三元社
- 吉見俊哉 (2004)『メディア文化論: メディアを学ぶ人のための15話』有斐閣

